# 幸田露伴『ケチ』論

## ――現実を照射する装置としての私小説――

筑波大学大学院　王　菁　潔

### はじめに

幸田露伴の『ケチ』は雑誌『現代』に大正九（一九二〇）年一〇月創刊号から一二月号まで三回にわたって掲載され、後に単行本『龍姿蛇姿』（改造社、昭2・1）に収録される際に『望樹記』と改題された。[1] これについて、塩谷賛は、『龍姿蛇姿』に収める時に、『観画談』（『改造』、大14・7）と並べるために改題されたと推測している。[2] 事実、短編集『幽情記』（大倉書店、大8・3）が編集される際、二篇ずつ題名が対になるように一部の作品も改題された例がある。塩谷の推測は当たっているであろう。一方、川村二郎は小説の中心を樹の被害をめぐった東京の治政に対する「考証的・批評的論述」とし、題名は「望樹記」であるべきと主張している。[3] 関谷博は、塩谷の推測を認めた上で、「ケチ」と「望樹記」が語り手の「意識の統御から自由な他者性を守っている」ことで、題名として質的差異は無いと指摘している。[4] 筆者は塩谷の改題事情や、関谷の題名の間に質的な差異がない指摘に賛同する。そこで、本論では同時代的意義を考察対象とするため、「ケチ」という初出の題名に従う。

川村と関谷は共に『ケチ』の批評性を読んでいる。川村は東京の治政に関する「考証的・批評的論述」を小説の中心とし、作品の主題は「時世の移ろいに対する感慨」であると述べている。[5] 関谷は川村論を踏まえて、この作品における「時務論的批評」の内実を分析し、蓮實重彦の「『大正的』言説と批評」（『批評空間』、平3・7）に依拠しつつ、この作品の批評性は、「分離よりも融合を、差異よりも同一をおのれにふさわしい環境として選びとり、曖昧な領域に『主体』を漂わせたまま」の『大正的』言説に抗して「言葉の他者性をいつくしんだという、語り手のふるまい」にあると論じている。[6]

しかし、批評性を表す部分だけでなく、作品全体を読むべきであろう。本作のジャンルについて、塩谷は「露伴がいままで筆にしなかった」「作者の身辺や心境も窺え」る「私小説」であると指摘している。[7] それに対して川村は、塩谷の「私小説」というのは「ごく軽く用いられた評語」であると述べ、本作と「心境的私小説」との違いを指摘している。[8] こうした川村の評論に異論を唱えるのではないが、何故塩谷が私小説と称したか

を考えてみたい。私小説は大正末から盛んに議論されるようになるが、本作の発表された大正九（一九二〇）年に、宇野浩二による私小説に関する初期的言説が掲載された。[9]

近頃の日本の小説界の一部には不思議な現象があることを賢明な読者は知つて居らるゝであらう。それは無暗に「私」といふ訳の分らない人物が出てきて、その人間の容貌は無論のこと、職業としても、性質にしても一向書かれなくて、そんなら何が書いてあるかといふと、妙な感想の様なものばかりが綴られてゐるのだ。気を付けて見ると、どうやらその小説を作つた作者自身が即ちその「私」らしいのである。大抵さう定まつてゐるのである。だから「私」の職業は小説家なのである。そして「私」と書いたら小説の署名人を指すことになるのである、といふ不思議な現象を読者も作者も少しも怪しまない。

宇野浩二は、当時の文壇において人物設定のない「私」が感想のようなものを綴り、読者もその「私」が小説を書いた作者自身であることを疑わない小説の出現を指摘している。宇野浩二は『奇蹟』の同人であるが、この時期他の同人と違い、自然主義の伝統からやや身をずらしていた。そのためでもあろうか、私小説を否定的に捉えていた。

ともかく、この言説によれば、『ケチ』は私小説の要素を備えている。『ケチ』において、主人公の「自分」の一つの言葉にまつわる心境が語られる。冒頭から人物紹介が為されず、「自分」がこの一、二年来、「年をとるとケチになる」という言葉が時々脳裏に浮かぶことから始る。また「自分」が書斎で仕事をすることや、釣りの趣味を持つこと、住まいの場所等は、露伴と重なっており、また、露伴は本作について「一々皆真に其物有り、其人有り、其景致、其情感有つて、而して写し出したものである」と証言している。[10] 塩谷はこのような根拠により私小説と評したのであろう。

ただし、私小説との異同に関する川村の指摘や、本作の批評性にこだわる関谷の指摘からも明らかなように、『ケチ』は単なる私小説ではない。『天うつ浪』が中絶した後、文壇から遠ざかった露伴は、大正八（一九一九）年に歴史を題材とした『運命』によって再び文壇に復帰した。その次の年に、何故私小説の形式を借りてこのような小説を書いたのだろうか。本論は、作品分析を行い、本作の主題を考察した上で、同時代における本作の位置づけを試みる。

## 一、近代以前の老婆から見た近代化―老婆の話

本作では「年をとるとケチになる」という言葉をめぐって二つのエピソードが書かれている。一つは神様の下で「勿体無い」を唱え、糸屑や紙屑を再利用する老婆のエピソードである。「時世おくれ」と自嘲した老婆の口から当時の社会現象への批判が述べられている。

「ハ、ハ、。しかし世の中は小癪になりましたネエ、何様でせう一寸買物をしてもこんな糸で縛つてよこすなんて。むかしは縅黄縄ばかりで済んだものです。買物するには風呂布を持つて行きますもの、一々紙で包んでこんな物で縛

るなんてことは、実は無駄手数無駄物づかひですが御体裁すぎの無精の人には気に入りさうな事なので、何処でも仕無いところは無いやうになりました。此糸だつて何でせう遠くの国の百姓がこしらへた綿を、えつちらをつちら石炭を焚く船で運んで来て、それから外国ごしらへのすばらしい機械へかけて、年が年中芝居の雪に降られた石灯籠みたやうな工女さんの手の世話を受けさせた果が、やつと世の中のこんな用に立つのでせう。考へてごらんなさい、あだやおろそかにしては勿体無いぢやありませんか。」

老婆は先ず包装の無駄遣いの現象を批判している。日本の産業革命以来の、機械による大工業生産が背景にある。[11] その中で、物が安く多くなるにつれ、このような商品の過剰な包装が社会現象となってきている。そして糸の生産過程において、「年が年中」働く女工の問題が提起される。産業革命中に成立した主要な機械制大工業は綿紡績業であった。その中で、出稼ぎ女工は低賃金で過酷な労働をした。

「デイデイ屋」という鼻緒の前つぼ等を直す江戸の風俗の代りに、老婆が手製の鼻緒の前つぼで通りかかりの人を助けようとする。この日、老婆がある婦人を助けた後に、二人の男に嘲笑われた。

「通りかゝつた二人づれの男、余り感心しない洋服に、やすい洋杖（ステッキ）薄ッ髭、ぶら〳〵と鷹揚らしく勿体ぶつて歩いて来かゝりましたが、一人が行過ぎながら、わたしの方を見て、『御安直な慈善かうゐサネ。』と言ふと、もう一人が振顧つて見て、『フン。』と云つて、『慈善でもないサ、ト言つて義侠といふほどでも無しカ、ハ、ハ、。』『ハ、ハ、。』と行つてしまひました。」

老婆が人の役に立つつもりで作った鼻緒の前つぼは、男等にきわめて安っぽくてつまらないものだと思われた。男等は、文明開化がもたらした「洋服」「洋杖」「薄ッ髭」[12]の格好をしている。西洋かぶれで近代化を是認している男等は、資本主義の価値観にとらわれて、老婆の献身的な行動を一本の鼻緒の前つぼの価値に縮小させた。これに対して老婆は男等の格好を「余り感心しない洋服に、やすい洋杖薄ッ髭」と形容し、近代化の過程のなか生まれた機械で大量生産された割と品質の低い商品を鋭く批判し、その格好をして自慢そうに歩いている男等の滑稽さが浮き彫りになっている。くわえて、老婆と男等との衝突について、「自分」が老婆を慰めている部分においても男等への批判が見られる。

誰にむかつてだつて、御安直だなんて侮蔑の意味を含んで居ます、失敬千万な、田圃中の泥濘路かなんぞで其奴の鼻緒がきれて弱つた時、ヒョックリお婆さんに出遇はせて、お婆さんの親切を貰はせてやりたい。

これが示唆するように、この男等も鼻緒が切れると困るので、彼等の老婆に対する考えは理不尽である。老婆との対立から、男等は近代化の良し悪しを問わずに受け入れた近代人として描き出されている。

## 二、近代人の「自分」が見た近代化――「市治」の問題

「年をとるとケチになる」をめぐって、もう一つのエピソードは、「自分」が今年の春に一本の桜樹に対して考えたり、調べたりする話である。特に筆を費やして書かれているのは「市治」の問題である。一年前の嵐の特徴は「雨を伴なはぬ割合には余の庭及び隣家の庭の樹木を其の根から抜き倒したことの多かつたことであつた」。「自分」はその原因が「風力の強かつた故のみでは無」く、「市治」の問題であると考えた。具体的には、市外地の戸数の激増で多量となった下水による土壌の酸化、増設される工場の煤煙による空気の不浄、そして隅田川下流の埋立地等による地下水の水位の上昇といった原因を指摘している。関谷は地下水の水位の上昇は地盤沈下現象の非常に早い証言であると述べている。確かに「地盤沈下」という言葉が紙上に現れるようになったのは昭和七（一九三二）年頃である。その頃ようやく江東地区にある運河の流れに異常が生じたり、高潮の時に浸水が深刻になる現象が地盤沈下に関連したものとして理解されるようになった[13]。しかし、大正九年に発表された『ケチ』においてすでにその関連を示している。

隅田川の水面が平日に於て高いといふことは、東京市の暴風雨及び津浪に就ての危険率を高くしてゐるのである。況んや東京湾の大潮は春秋に於ては潮の干満のみでも七尺の差があるのであつて、地盤の低い市に取つては七尺だけ水の膨れるといふことは軽いことでは無い。（中略）河水の放流といふことは二重にも三重にも不容易になるのである。これでは東京市が水害に悩まされることは、有る可き道理で不思議も何もない。

露伴は本作において東京の水害と地盤沈下との関連を早くも指摘している。地盤沈下は大正一二（一九二三）年関東大震災後、東京の水準点を調査した際に発覚した。それより前に露伴の洞察力によってこれらの現象を関連させて理解出来ていた。

また、「自分」は「工場の増設より生ずる煤煙の多量になった」ことを指摘しているが、当時の状況は記者で社会運動家の山口孤剣の『東都新繁昌記[14]』によれば以下のようになる。

京橋、日本橋が東京の『商業』を代表するやうに、深川と本所は東京の『工業』を説明する。前者の算盤玉を弾く時、後者の器械はぐる〳〵と廻つてゐる。富士紡、鐘紡、日清紡の工場は本所及之に接した処に在る。否紡績ばかりではない。種々の工場は本所に在る。『此処王孫遊　煙波落日浮　自看洲鳥白　京国至今愁』と詩人をして歌はしめし業平橋に立て眼を放てよ。東京瓦斯電気、日本製氷、高砂精米、日本硫酸礬土、東京食料品製造、三田土ゴムの諸工場は、煙突から吐き出す煤煙真つ黒に、悪鬼のもがくやうな器械の下に、炮烙の苦を嘗めてゐる労働者の痛ましき汗を思はせる。（中略）見よ林立する煙突は自然に河を圧する籬となり、汚物塵埃は異臭を放ち、一時間内外の花見に、女は白いお召しに黒点を印し、男は鼠色の痰を吐かねばならぬといふやうでは、本所の名物は向島の花ではなくして、ペスト菌だといふ口悪男も出て来るのだ。

（『東都新繁昌記』職工の本所・煤煙霧鍵工場村）

生方敏郎君は砲兵工廠撤廃論を唱へて、次のやうに云つてゐる。

砲兵工廠は人家稠密の都会を避けて、是非共人煙稀薄な田舎へ移さねばならぬものだ。何の必要があつて是れを東京の真中に多くの人の健康を犠牲にして迄も置く必要があるだろうか、砲兵工廠の煤煙を頭から浴びせられる街々は、本郷と神田と小石川と牛込だ。そして此の区は最も学者の多い処だ。勉強仕過ぎるから肺病になるとか、秀才過ぎるから肺病になるとかいふ前に我々は如何に多くの学生が砲兵工廠の煤煙の為に肺病を患つてゐるかを思はなければならない。

東京に於ける肺病患者、十五区の内、浅草本所を除く時は小石川が一番多いといふことは確か生方君のいふ通りであるが、然し砲兵工廠ばかりを罪するには当らない。小石川は今や煙突林立の工場街たらんとしてゐる。其の煙突の煤煙は小石川の繁栄を祝福せんとするものであつて、『富』の前には市民の健康も趣味も幸福も蹂躙し去らんする今日の社会では仕方がない。

（『東都新繁昌記』学者の小石川・地価の騰貴）

当時の東京では、工場地帯の煤煙が花鳥を害するだけでなく、「市民の健康も趣味も幸福も蹂躙」していた。東京の近代産業が大規模となり、煤煙の問題が貧民窟から市民に広く影響を持ち始めたのは第一次世界大戦を通じてである。[15] 本作においてまさに当時の大きな問題が突かれている。樹木の被害の原因を語ることよって、実際の人々の生活に密接した公害の問題を指摘している。経済が発展する一方、自然や人類がそれに害されるばかりで、政府が対策を打たない状況を批判している。これらの問題を指摘した後、「自分」は諦めるしかないと吐露している。

時々水害が起るのは地面の洗濯だとでも思つて、「あきらめる心の底はむごい也」で、一寸いやな気はするが、まあ皺くちや面にならぬ道でがなあらう。然うも片づけて置かねば、常習性――不平狂といふ病名でも頂戴して、巣鴨へでも生埋にされることだらう。

「市治」の欠陥を知りながら、精神病者にされるという迫害を恐れて、その不平を隠して曖昧な態度を取るしかない「自分」が描かれている。不平を言い続けると精神病院へ「生埋」にされると書いたのは政府の言論統制を諷刺している。「自分」は不平を隠すと言いながら、遠回しに批難している。露伴は深い洞察力と鋭敏な反応により近代工業化、都市化の問題を暴露している。

## 三、近代合理主義の相対化―「自分」の心境描写

一節と二節において、近代以前から生きてきた老婆と近代人として生きている「自分」の両方を通して近代化が批判されている。注意すべきことは、「自分」は近代に生きながら、近代合理主義者ではない点である。それを端的に表してるのは「自分」の心境描写である。本作における心境の描写は自然主義の

客観的心理描写と違い、無意識・潜在意識を描いている。例えば、冒頭部の心理描写を見てみよう。

「年をとるとケチになる。」

此言葉は誰から聞いたのか、また何時おぼえたのか、其由来が甚だ不明であるが、何でも其由来が忘れられたほど遠い過去に、そして其由来が想ひ出されぬほど不注意に受取つた言葉に相違ない。それが何様したものか此一二年来、時として頭を擡げて来る。

「年をとるとケチになる」という言葉が頭のどこかに潜んでおり、「時として頭を擡げて来る」ように、あくまで意識せずに想起されている。他にも「何処からか聞こえる」と無意識にこの言葉が浮かぶように描いている。

また、「とねりこ」という樹の名前を想起する場面は、仏教の「輪廻応報」の道理で説明するほど不思議な体験として描かれる。

昨日と今朝との間の自分は熟睡して何も知ら無かつたが、過去に於てたゞ僅に心境に触れたのみのとねりこが、我も求めず彼も来らぬのに、時節因縁で忽然と躍り出して来るのである。千畳敷へ落とした針の音の微かなのも滅するものでは無い。輪廻応報の道理で、其者に跳り出されて、其の因は其の果を生じ、其の業はその報を受けるであろう。自分がたゞ何かの書で遭遇したゞけのとねりこさへ、今朝はおのづからにして現はれたのである。

前日に「とねりこ」についての考えが膠着してしまって「いくら目を睜つても無駄な霧の中で見えぬものを見出さうとする痴態に陥つて終」い、つい何も得ず寝てしまったが、次の朝食時に、「とねりこ」が生きているかのように「自分の世界」に「踊り出した」。これは潜在意識の働きによるのであるが、露伴は宗教の体験として描き、一層神秘性を増している。

この無意識・潜在意識の描写は『ケチ』から始まったものではなく、露伴の初期作品にすでにこの傾向が見られる。成瀬正勝は初期のテーマの一つである「風流」を以下のように解釈する。[16]

今日の精神分析学に照せば、それはもっと適切な用語で、この種の意識下の意識を捕え得たかもしれない。すくなくとも合理を超えた何物かである。氾濫すれば魔的エネルギーであり、凝固すれば純粋な精神的エネルギーでもある。自在に融通する点からすれば、まさしく風流と呼ぶにふさわしいであろう。

成瀬は「風流」の発想が露伴の仏典読破や、文明開化の合理主義の射程外の北海道時代に因ると述べている。一方、『ケチ』になると、明らかに近代の合理主義が浸透している。主人公の「自分」は樹の種類を認識するために、「科学の書」である自然分類の検索表[17]を使おうとしたり、庭師の老爺と楞樹が良い樹か否かの議論をする中に、持ち出した論拠が「強いものが好いもので、弱い者が悪いものだ」というダーウィニズムの優勝劣敗の論理であったり、楞樹を好い樹と証明するために、西洋の釣りの書、『淮南子』、百科辞書等よりその用途を探し出したりする。これらは皆合理主義や科学主義的な振る舞いである。しかし、自然分類の検索表を「久しく書架の塵埃に埋もらせ」たま

ま、「自分」はつい隣の庭師から樹の名前を聞いた。優勝劣敗の原理で好いものとなる雑草の蒐には「自分」も「大閉口」で、「全く彼には恐入る」。更に、大昔の東洋の本、遙々彼方の西洋の本等より発見した桜樹の用途は日本において実現できず、あくまで紙上の空論に過ぎない。つまらないと言われた桜樹を価値のある樹と証明することに対し、「自分」は「年をとるとケチになる」と自嘲することになる。このように、文明開化がもたらした合理主義や科学主義が相対化されている。先述の無意識・潜在意識の描写も合理主義や科学主義を通過した後、それらへの抵抗として読み取れる。

## まとめ

明治の文明開化より日本は近代化の道を進んでいる。しかし、それに伴い、老婆が言う浪費の問題、女工の問題、また「自分」が見た公害の問題が発生している。男等に代表された近代化の是非を問わずに受け入れた人もいる。露伴は私小説の形式を借りて、それらの問題を指摘しつつ、文明開化がもたらした科学主義や合理主義を相対化することによって近代化する日本社会に対する文明批評を行っている。一人称の主人公の心境を綴る形式を用いたとはいえ、露伴の社会を見つめる姿勢は個人にこだわる私小説と大きく相違する。私小説が流行するなか、露伴は現実の問題に触れる小説を書いた。社会を見つめる姿勢は次の資料においても明白である。『現代』に『ケチ』を発表した際、雑誌名に因んで現代を論ずる意義が述べられる。[18]

思ふ可きは今日なり。昨を思ひて今を忘るゝを棺裏の活計といふ。明を思ひて今を忘るゝを現鐘打たず更に山を鋳るといふ。好く今日に行はば、昨もおのづから好く、明もおのづから好からん。論ず可きは現代なり。前古を論じて現代を遺るゝを、雨霽れて蓑笠を被るといふ。後世を論じて現代を遺るゝを、火を熾んにして空鼎を烹るといふ。善く現代を論じ得て中らば、前古を論ずるも中り、後世を論ずるも中らん。

『ケチ』もこの題辞が述べた通り、現代の問題を取り上げるのである。露伴は武士の家柄であり、明治政府の権力の外側にいながら、士大夫の自覚によって、常に社会問題に関心を持ち続けている。日本が近代化によって大きく変容する中、露伴は多くの評論を残している。例えば明治三〇年代、日本の産業資本を確立させる段階で、「都市問題」が現れた。幸徳秋水序、細野猪太郎著『東京の過去及将来』（金港堂、明35・9）が出版され、露伴は『一国の首都』（『新小説』明32・11／12、34・2／3）を書いた。『一国の首都』は東京が江戸に比べて醜悪な都会に堕落したのは、薩長出身の政府高官の責任であると批判することから始まり、幼稚園の増設、道路、下水道の整備等、近代的都市としての東京の未来図が縦横に論じられる評論である。[19] 例は枚挙に遑がないが、『ケチ』が書けたのは、常に社会問題に関心をもっていたからこそである。

文明批評を行おうとする露伴は何故当時の文壇の一現象である、一人称の主人公が心境を綴る形式を用いたか。前年に文壇に復帰した露伴は、自然主義以降の大正文壇に、特に私小

説の流行に対して意見を述べたかったのではなかろうか。大正五（一九一六）年一〇月の『新潮』は、文壇新機運号という形で編集されているが、武者小路実篤、長与善郎、里見弴ら『白樺』組にまじって、『奇蹟』の同人である相馬泰三と谷崎精二が作品を寄せている。これで彼等は大正文壇の中軸の人となった。白樺派の「自己肯定」と『奇蹟』の同人なる新早稲田派の「心」の重視は共に個人にこだわっている。[20] 露伴は「自然派勃興以降の小説壇」（『新日本』大6・1）において、次のように語っている。

> 而して又、翻へつて一方作家の側に就いて観ると、これ亦概して筆先の努力と云ふことのみが主として重んぜられ、創作に最も須要なる感激の方が、傍位に置かれて居はしまいかとの嫌がある。凡そ創作の成素に努力の必要であることは、著明のことであるが努力ばかりでは不可ぬ。必ず其処に感激がなければならぬ。感激と努力の二つは互に相俟つて芸術品の光を発揮するものである。勿論今の文壇諸家の小説にも、感激がなくはないのであるが、その感激が大なる感激ではなく、小さな個人の感激が主となつて居るやうに思はれる。（傍線筆者）

露伴はこの頃の文壇の傾向について、「創作に最も須要なる感激の方が、傍位に置かれ」、しかも「個人の感激が主となっ」たことを指摘している。つまり、白樺派や新早稲田派に代表される私小説の類に不満を漏らしている。露伴は『ケチ』において、私小説の形を用いながら、「小さな個人の感激」に止まらず、社会問題に対する深い洞察力を示している。事実として読まれる私小説を逆手に取って社会の現実を照射する装置として駆使した。大正文壇に対して、「大なる感激」の小説を書いて見せた。

## 注

（1）単行本に収録される際に、例えば初出の「S博士」が「斎田博士」に変更される等、本文に語彙の異同が見られるが、内容にかかわる大きな異同が見られない。

（2）塩谷賛「望樹記」（『幸田露伴』中巻、中央公論社、昭43・11）

（3）川村二郎「観察から幻視へ―幸田露伴論―」（『文学界』25巻1号、昭46・1）

（4）関谷博「『望樹記』論―大正期露伴の批評活動」（『立教大学日本文学』69号、平4・12）

（5）前掲注3

（6）前掲注4

（7）前掲注2

（8）前掲注3

（9）宇野浩二『甘き世の話』（『中央公論』大9・9）

（10）幸田露伴「序文」（『龍姿蛇姿』改造社、昭2・1）

（11）宮地正人「一九〇〇年代の経済構造」（『新版世界各国史1日本史』山川出版社、平20・1）

（12）『文明開化絵事典』（PHP研究所、平16・4）によれば、三代将軍・徳川家光の時代に頼髭禁止令が出されていたが、文明開化とともに西洋の風習が日本に上陸し、髭を生やすことが流行した。

（13）東京都公害研究所『公害と東京都』（東京都広報室、昭45・6）

（14）山口孤剣『東都新繁昌記』（京華堂書店、文武堂書店、大7・6）は

大正四（一九一五）年一二月より大正六（一九一七）年二月まで新聞『新日本』で連載された記事を収録したものである。

(15) 前掲注13

(16) 成瀬正勝「紅葉と露伴における小説の理念」（『国文学解釈と鑑賞』昭40・1）

(17) 自然分類の検索表は斎田功太郎、稲葉彦六共著『新撰植物教科書附録・植物自然分類検索表』（大日本図書、明37・3初版）のことであろう。注1の通り、『ケチ』の初出では「S博士の著」となっているが、『龍姿蛇姿』に収録された際、「斎田博士の著」となっている。木原均、篠遠嘉人、磯野直秀著の『近代日本生物学小伝』（平河出版社、昭63・12）によれば、斎田功太郎は東京大学が明治一〇（一八七七）年一〇月に開学した時に開設された生物学科植物専攻の矢田部良吉教授の下で勉強し、大学院で博士学位を得た。その『大日本普通植物誌』や教科書は広く用いられた。

(18) 幸田露伴「現代に題す」（『現代』創刊号、大9・10）

(19) 小田切進『日本近代文学大事典』第二巻（講談社、昭52・11）における前田愛が執筆した「幸田露伴」の項目に拠る。

(20) 紅野敏郎、三好行雄、竹盛天雄、平岡敏夫『大正の文学』（有斐閣、昭47・9）